

# 素材の生産構造

北海道の実態を中心として

福島康記

(東京大学農学部)

## 目次

- まえがき
- 一、「組」の検出
- 二、「組」と「組」との関係、事業所による作業管理
- 三、生産規模の拡大
- 1 生産手段
- 2 労働組織
- 四、まとめ
- 後記

## まえがき

素材生産に関する研究は、藤本武氏による「林業労働賃金に関する研究報告」(昭和二六年)、農村問題調査会「素材の生産構造」(同年)以来停滞を示していたが、ここ数年の間に幾つか論文も表われ、実態調査も十指に達する程になり、昭和三七年には全国的な統計調査もおこなわれた。

\* 坂本一敏「素材の生産構造」倉沢博編「林業生産の構造」(昭和三六年)所収、佐野宏哉「素材生産の経済的構造」林業経済一六六・一六七・一六八号(昭和三八年)、村尾行一「わが国の素材

業について」林業経済一八〇・一八一号(昭和三八年)、山岡亮一・山崎武雄編「林業労働の研究」(昭和三八年)、など。

\* 農林省統計調査部「素材生産業者調査」。

研究が徐々に進められている状況のわけだが、それだけに、それらを総覧してここで研究の一段の深化が望まれると考えるのは私だけだろうか。

研究の深化のためには、技術的特性によって形成される個々の労働過程をめぐる諸関係の実態解明に直接とりつのが最もてっとり早い。生産の最底辺にまで降りて論理を再構成しなければならぬ。

\* こういう観点からして奥地正「伐出労働力と「組」組織」林業経済二二〇二号(昭和四〇年)は注目される。また、冒頭に記した農村問題調査会「構造」の尾鷲での確実な分析は注目される。なお、倉沢博編「林業基本法の理解」で村尾行一氏が、この問題に大筋の展望を与えている。

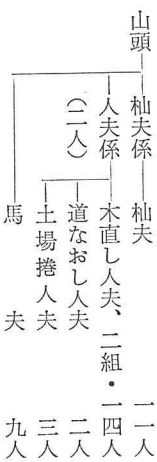
こういう観点によって、私は東大北海道演習林勤務の後半の時期に、北海道の素材生産の実

態調査をおこなった。研究会での小論はその経過報告である。そしてここでは、これまでの研究が多かれ少かれ概括的な認識によって進めている部分——労働過程をめぐる諸関係を報告することになろう。

## 一、「組」の検出

例示により説明しよう。

東大北海道演習林(北海道空知郡山部町)の昭和三九年九月はじめの直営生産(富良野西達布)の作業組織構成は左のようであった。(生産規模、立木一二、〇〇〇<sup>m</sup>、出材八、四〇〇<sup>m</sup>。変則で、三分の二は伐倒しただけで処分。作業期間七月七日〜九月三〇日)。



他に、これら全体を統轄する吉本という業者の兄弟(二人)と、監督・検収の演習林職員七人、検尺補助五人、炊婦一人、という構成である。

右図の山頭、人夫係、人夫係までが管理労働者であり、それらが中核になり作業組織が形成される理だが、作業組織全体からすれば、一方の労働者の側の組織——結合が検出できるのである。それは自生的な技能集団としての特質をもつ。それが企業の側の組織と結合し補完され、

区分	年令	年数	職種	専業別	出身	住所	備考
N 1	三	一五	人夫	専	農家二・三男	フラノ町支部	
N 2	四	一四	"	"	"	西達布	
N 3	三	一六	"	"	"	フラノ	
N 4	元	三	兼(農)	"	農家長男	南扇山	
N 5	三	四	馬夫	"	"	南扇山	
N 6	三	四	馬夫	"	"	南扇山	
N 7	三	四	専	"	農家二・三男	布部	
N 8	三	四	専	"	"	布部	

全体として生産の技術的組織として実現されている。

ここでは木直しこみちつけ作業が集団作業であり、一四人の夫は、八人と六人の組を作っている。まず、A組の構成をみてみよう。

この組の形成は二段階になっている。構成員のこの数年の間の就業状況は、夏には、N1は製材工場の土場捲、N2は一度澱粉工場で働いたほかは演習林の造林、N3は農業日雇、N4は隣村の奥地国有林の直営生産の請負造材の作業に出て、冬は、全部がこの三年間、相田木工所(富良野町支部)の造材作業に出ている。それぞれ専業労働者であるし、住所も遠くなく、一緒に働いた経歴からそれぞれの力量・氣質を熟知し、普段ゆききしている仲間でもある。

この場合、盆が終って、N1が吉本氏に就業を頼みにきて意向をきき、N2・N3・N4に通知し集合した。そして、更に吉本氏の依頼に

より、N1の従弟のN6を通して、N6と地縁で知り合いのN5・N7・N8の計四人がその後集合している。

夏の道つけ木直し作業は、杣夫が伐倒した丸太を木元から大道(馬搬道)までトビでせて出す作業であるが、筐かり・ネキ切りなど雑作業を含み、状況により二人・四人と随時組みになり、多様な条件に対応してゆくのである。N1が体格抜群で気も強く力量にすぐれ、N2・N3も豊富な経験を持ち(N4は作業能力が劣る)、それらが中核となりこの組が形成され稼働している。N5・N6・N7・N8の中には未経験のものを含むが、何れも農作業を通し重筋作業・雑作業には慣れているといわねばならぬ。複雑な環境の中で多様な分業協業による作業をこのような構成でおこなっているのである。

事業所事務所によるこれらの総体の管理の日常直接的なものは、これら八人を一組として一本の出来高を決めることに一義的に集約されてしまふ。ある採面が指定され、その中に散在する丸太を運搬し移動させるという労働の過程に直接関与せず、その結果たる用益を道ばたに並べられた丸太の石数に単純に比例させ、既に決められた単価で買いとる。ここで企業と労働者

の間にある中断がおこっている。労働手段も個別労働者が所有している。では作業管理はどうおこなわれるか。

この組では二、〇〇〇円を前後して最高から最低まで一五〇円の差をもつ「歩」が決められ、その割合で出来高給が配分される。林業労働では団体出来高給の配分が平等かほぼ平等であるのを特徴とするといわれ、事実そうであるが、これは林業に限らず土建など重筋集団作業一般にみられる現象である。それぞれの技能や力量による貢献度を統合し、個々が主観的に統合され客観的組織として形成されるためには(作業の相互管理)、そうであることを必要とする。

右の作業で、トビが使え技能にすぐれたものの、統卒に秀でたものはたのしんで仕事ができ、不熟練のものは筐かり、土堀りなどのいやな作業をやらせられ、また、同じ作業をやるにしても著しく労働の強度を増す。この組では誰がみても劣るというN3に僅かな差をつけているだけである。

\* 一般的にいて、平等性は組作業の必須条件ではない。まず誰でもが認めようような「歩」が決められ、お互の間に公表され公認される。このような経過によって技能や力量による作業全体に対する貢献度が統合されるのだ、と考える。近頃は「組頭」(後述)の独断性が弱まり、組集団が自主的に形成されることが多いため、「平等」の組

が多数を占めている。

個々の労働者は、同じ組内の仲間、具体的作業の中、それに日々うけとる賃金の中に労働条件をみる。さらに組の仲間はそれぞれ飯場での主たる生活環境である。そのほか、個々の労働者は口を揃えて事務所の側の頭を大きな環境条件にあげが、ともあれ、それらの総体を主観的に判断し、気にいらなければ組から離れるのである。組を変わり或は現場を変わるだけだが、最終的には杣、大道つけ、道修理など単独作業に定着する者もでてくる。その間に否応なしに自らの能力、性格を評価させられることになるが、単独作業では自らの力量がともかくも直接的に評価されるから満足するほかない。

木直しのもう一つの六人の組は、何れ又地元農家で年令は二一歳から四〇歳(頭格)まで、経験は足かけ年数で六年から二〇年、何れも技能力量の揃った者だという。賃金は平等分配で、昨年の夏と今年と同じメンバーで当事業所に就労している。

更に集団で作業をしている者に、杣夫の二人の組が三組ある。作業には一人がチェンソーを持ち、一人が手伝い雑作業をやる(テコ)。チェンソーを交代で使うのと、一方のみが使うのと両方ある。二組が地縁(秋田)、一組が血縁関係であり、前二者はこの現場ではじめて組み、後者の組みは八年来のものである。その他に馬夫の五人と四人の組がある。馬搬は単独作業であ

るから作業上の分業協業関係はないが、地形とか道の配置上共同して同一採面に何頭も入り作業をしている。共同で一採面を請け出来高を分配する。五人の組が山部町の農家で地縁の知り合い同志、四人の組の二人が新十津川村の農家、二人が滝川町の専業労働者で四人はお互に知り合い。こういう分配の上だけの組もあるのである。

その他の労働者は単独作業でそれぞれ単純出来高給で作業をする。これら単独作業の労働者と集団の組が、それぞれ作業の単位として、既記のような全く同じ関係で事務所と対している。

組についての説明をもう少し続けてみよう。一般的にいて、林業労働者は常々お互に情報を交換しあい、業者の動向や条件、近隣や友人の動向を実によく知っている。就労の伝手として友人をあげる者が多い。そういったことは、雇用の不規則さが林業労働の特性という状況だから、常々次の就労を自ら探す必要がある。特に集団作業では既にみたような作業条件を就労の前提においている事情を反映するものである。

あるばあいには、作業集団の形成が全部的あるいは部分的に事務所の指示によることがある。しかし、それは組形成の一つの契機なのであって、結果的に結合は個々の労働者の選択により維持される。各所でしばしばこういう経過

的な例をみるが、全く一時的なものや形成・維持に自主的積極的な性格を欠くものは組とは言えない。

組はあるばあい補充されず、他から臨時に人を入れ作業をしている例もみる。そして、成員が怪我で一時期脱落し、補欠された者がそのまま残り、前者が回復した後も復帰できず排除されてしまふ例もある。

組という集団が、成員のお互の性格・力量・技能程度の熟知、分業・協業上の技術的合理性、分配上の合理性という条件を満たしている限り客観的なものであるが、それはあくまで自生的なものであり、主観的に統御されるが故に様々な組合せを内容としている。成員の能力の揃ったもの、作業によつては異った年令・能力・性格をもった労働者の組合せをもつもの等々。また、屈強の壮年者を揃えた異常に生産力の高い組から、能率の著しく低い組等々、技能集団として様々なグレードが存する。あるグレードから下は業者により排除され、集団は解消せざるを得ない。そのようなものの成員は、最終的には、個々に道修理などの雑作業にまわらざるを得ない。

ともあれ、組の結合の強度は、前記のような客観的条件と能率(高賃金)によりはかられるわけだが、それは特に技能を要する作業、危険な作業に要求され、そのような作業にはより緊密な関係の組の存在がみられる(伐り出し、木

直し、架線、集材機特に大型集材機作業など。この集団は自生的なるがゆえに、地縁とか血縁とか、作業や雇用以前の類縁関係の濃かるべき関係が検出されるのは当然だろう。それに関係して次のことを注意しておく必要がある。

この集団が自生的主観的に、それも人対人という狭隘な関係を通して形成されるため競争が不完全にしかおこなわれない場合が多いことから、組織の技術的合理性に欠けたり分配の公正を欠いたりすることもあるということである。地縁・血縁、交友関係が主たる結合要因となっているという倒錯した関係の組織もみられる。

\* 恵盛木材株式会社白糠出張所の現場で、同部落知人（うちに血縁を含む）の八人が一緒に就労し、木直し作業の二人づつの組をくじびきで決めている例があった。一人力能に劣るものがあるが、作業の必要と一緒に来た知人という理由で致し方なくそうしているというのである。

組の成員が固定され結合関係が継続する期間もまちまちで、その現場限りのものから先の杣の例の如く小組だが十年近くに達するものまである。結合に緊密さが要求される作業ほど長いようだ。しかし、全体として、二、三年続くものは長い方で、むしろ結合は経過的なものでさえあるといえる。また、夏の収穫地だけ組を作り、地元では分散してまちまちの就労を示す、といった例もある（坂本木材の集材機和歌山県労働者の組）。

業を含むものであっても変わらない。先に素材生産者による林業労働者の雇用・使用が、資本による労働力の購入・使用であるより、労働の成果を買いとるというような商行為に類する内容の労働組織の自主的形成・相互管理についてみた。しかし、作業には、計画を立て労働者を配置し、更に架線・索道などの配置設計、日々の上級の作業管理・統轄等の管理作業がある。事業所には、山頭・人夫頭・杣頭といった長年多種の作業に従事し経験を積み、かつ統率力を持った管理労働者がいる。それらは採面割り・単価の決定に関わり、作業の進行を管理し必要に応じ指示を与え、個々の労働者や組で処理できぬ技術的な困難な問題を解決する。その他人心を治めるといった配慮をする必要がある。林業作業はあくまで人的構成が基軸だから、その面の管理が能率にも著しい影響を与える。しかし、労務管理の主要部分は既述のように、労働者の自生的組織を媒介とするという構造をもっている。

さて、いままで主として東大演習林の作業によって説明してきたが、更に小規模の作業となると杣夫が一、二人、出しの組が一組で足りるという状況も当然考えられる。そのばあい、業者は、立木を買い、労働者を山に送りこみ、道端にできた丸太を測り、約束の単価をかけた賃金を払うだけというような商業的行為に終始する形態のものとなる。

さて、一方の素材生産業者の側としては、雇用の継続性により自ら労働者の客観的組織を形成せしめえず、以上のような労働者の自生的な結合を維持し利用するという形で労働過程に関わりをもち、間接に労働の生産力を確保し自らのものとする関係にあるから、かかるものとしての労働組織（Ⅱ組）を前提としてうけとるほかない。このような組の存在は林業技術の低位性のあらわれであるが、素材生産の季節性・移動性・分散性、全体として労働雇用の断続性・不規則性といった特質の中で、その存在によって林業技術が実現されているのである。それはまた逆に、林業労働者の雇用がなお臨時性を脱していないでいるという事情の技術的な根拠でもある。

以上で自生的な「組」組織の性格、機能、再生産の問題はほぼ説明し尽したと思うが、念のため、個々の労働者の技能の習得について補足説明を加えておこう。機械を扱う技術に関して別項で述べる。

素材生産業者の労働力管理が一義的間接に単純出来高給制でおこなわれ、また集団作業には様々の力能のものが含まれるという事実により、技能の修得は実作業のうちにおこなわれる。昔から杣夫の父親の弁当持ちから山仕事を始めるはなしをしばしば聞くが、自らチェーンソー持ちのテコになってチェーンソーの使い方を覚えようとしている例も二、三みた。東大演習

この形態のものから、のちにみるような小竹組・矢田組の規模のものまで、生産規模の拡大につれ、業者の労働管理組織も強化され、甚だ限定つきながら作業管理は強化されることとなる。

### 三、生産規模の拡大

#### 1 生産手段

生産規模（量）の拡大のためには、まず既述のような作業の単位——組の数を増加させるという方法によるか、一組の就業期間を延長させるという方法による。私は嘗て、そのような事実から直接的に「大規模作業と小規模作業の相違は、既述のような個々ばらばらの単位の数の相違にすぎず、構造的な差異は見分しえないといえる」という報告をしたが、それは既述のような組の存在を大規模作業も前提としているという意味に限定する必要がある。素材生産は全体として既述のような関係——組制度を前提にしているのである。労働者との関係のほかにそれと生産手段との組合わせの差異（作業仕組）を考える必要がある。

\* 福島康記「素材生産の労働組織について」日本林学会北海道支部大会講演集第一三三号（昭和三九年）。

私のみた実例では、主作業の過程で生産規模一、〇〇〇㎡台では機械は用いられず、二〇、〇〇〇～三〇、〇〇〇㎡台で夏作業に集材機を

林の木直し作業で例示した今年をはじめて山に出た農民も、いずれ経験を積むだろう。馬夫は単独作業であるが、北海道の農民は子供の時分から農作業やたぎ運搬などをしてい、馬による大径丸太の運搬技術の基礎は充分すぎる程持っている。道つけ・道なおし作業に至っては力以外何の技能も要しない。また、労働者は望む仕事がない場合、他の職種に流動就労し、さらにまた、老令化と共に杣、土場捲、木直し等緊張と力を要する作業から離れ、単独の雑作業に就労することもここで指摘しておいてよいであろう。

### 二、「組」と「組」との関係、事業所による作業管理

最初に例示した東大演習林の直営生産では五人の杣夫の単独作業、二人づつ三組の杣夫の作業、八人と六人の木直し人夫の組作業、五人と四人の馬夫による馬搬作業、二人の道つけ人夫の単独作業、三人の土場捲人夫の単独作業が作業の単位であり、それらは併行的分散的に稼働している。相互の連繋は技術的に必要でない。それぞれが単純出来高制を媒介として事業所に個別的に把握されている。それぞれの関係として、それぞれの数の上での組合わせは作業の仕組、現地の状況、業者の側の条件で異なるだろうが、全体が有機的関連の下にあるとはいえない。このような事情は、集材機のような機械作

一、二台使用していた。\*そしてより大規模のものでは小規模の作業場にも集材機が使用されていた。\*つまり作業場の規模より企業の規模が機械使用の条件となっていることである。

\* 東大演習林関係業者六例、生産量はそれぞれ一五、〇〇〇～一〇、〇〇〇㎡。現場はそれぞれ一、三ヶ所。

\* 上戸別町矢田組、小竹組、生産量何れも二六、〇〇〇～二七、〇〇〇㎡。集材機使用は国有林直営生産請負作業の約一〇、〇〇〇㎡の現場。集材機は国有林より借入れ。

\* 坂本木材株式会社日高出張所は七〇、〇〇〇～八〇、〇〇〇㎡の生産をおこなっているが、一、九〇〇㎡と八〇〇㎡の現場で集材機を使用していた。

北海道では、機械使用の制約条件は甚だ大きい。だいいち、未だ作業の季節性が克服されていない。日高宮林署の機械履歴簿によれば、集材機の年間使用日数は六〇～一〇〇日程度（宮林署直営と請負業者貸付分を含めて）、ブルドーザーで一六〇日程度となっている。また、農作業の季節性が著しく、冬期作業は農民の農閑労働に依存している。前記の坂本木材の集材機作業に従事する紀州の出稼労働者も冬は帰郷している。このような事情で北海道の素材生産の機械使用は、国有林の直営生産は別として全く遅れているが、ともかくも右に例示したように少しづつ機械が使われはじめている。

機械の使用の条件は甚だ限定され、必ずしも

作業過程での採算を有利とするものでないが、労働生産性は著しく高まり労務管理費を安あがりしている。坂本木材十勝出張所による本別営林署緑南製品事業所一〇、〇〇〇㎡の請負生産は、三八年には一〇〇〇〜一二〇〇人の労働者による人畜力作業によりおこなわれ帳場も常時五〜六人いたのであるが、三九年にはトラクター運材への切り換えにより三〇人の労働者と一人の帳場とで可能となった。不慣れのため直接作業費は安くはならなかったが、事務所費、飯場経費は著しく減少した。

\* 坂本木材では、労務管理費として、労働者の総稼高の三〜四%に及ぶ組頭賃を支払っている。それについては後述する。

林業機械の現状は、確かに全体として労働強度を低め、労働の生産性を向上させるという機械使用に伴う一般的な効用をもたらした。しかし、機械使用に伴う最も基本的な変革である労働組織体系の変革（工場制作業）にまで及んでいない。

例えば集材機作業では、荷かけ二人、荷おろし一〜二人、運転手という組合せになるが、それぞれの間の緊密な関係は作業の基礎としている。技術的にもすぐれた人を統率する能力のある者が組織を統制し一体となって動く必要がある。運転手も頭となる者の指示にしたがい機械の運行を統御する。そして依然荷おろし作業にはトビを達者に使う者を配置しなければなら

ない。いわば集材機作業は、作業機、動力機が在来の人力集材の組織の中に部分的に入りこみ代位したという域を、組織の関係としては出ない。この関係を直接的に表現するものとして、集材機作業にも既述のような組が存在している。

\* 統率者がニカケかニオロシ運転手かは、実例としてはまちまちである。

\* 坂本木材日高出張所では和歌山県の出稼労働者の組が集材機作業を担っている。

集材機とならんでトラクターが先端的な「林業」機械だが、それも人間と機械との関係を変えてはいない。但し、この作業をめぐっての組は存在していない。現状では運転手を事業所で固定的に確保する方策がとられているものが多い。この事実と集材機作業における事情との関連は示唆的である。

坂本木材株式会社十勝出張所では、昭和三九年よりはじめて国有林の直営生産の請負事業を全幹トラクター集材機作業によりおこなった。

この出張所は前年までトラクター集材機の経験がなく、自動車や一般土木トラクター運転の経験のある者を通年雇用の「傭員」として確保し、講習にゆかせ技術の習得につとめさせ、作業の円滑化をはかっている。積つけ作業の人夫までを全部確保する方策はとりえないが、その二人を傭員にし、企業へのトラクター運材技術の定着をはかっている。なお、ここで使用され

ているトラクターは五台である。

これに対し、坂本木材の日高出張所では、三八年まで集材機・トラクター作業とも運転手は常備として確保し月給払によっていたのであるが、三九年より運転手でも組労働力に依存し、組に対し功程払で賃金を支払う方式に改めている。それにより能率は上がったという。

この坂本木材の十勝と日高の対照的な事例は、素材生産業者が新しい技術に対して、労働者を固定し技術の習得につとめさせ技術の自らの定着の力を致すが、技術が一般化し組織的に（自生的組織的に）再生産されるようになると、再び自らから組織を切離すに至る、という事情を示すものではなからうか。この事情は機械と人間労働力の関係が逆転するまでは続くだろう。

\* 新しい技術の定着については国有林が大きな役割を果たしている。チエンソーは国有林の使用により普及した。集材機についても、前記の上芦別の二業者の集材機作業は国有林作業員出身のものがおこなっている。

## 2 労働組織

上芦別の小竹組の代表者は何れも国有林の「組頭」をしていた経歴を持ち、作業及び作業管理に精通し、自ら精力的にかけまわっている。それぞれ元配下（旧国有林職員）など作業に通じ統率の才もある補助者を三〜四人常備的に雇用し、それに加え四〜五人の事務員、計

測員（帳場、検尺）という職員構成である。直接労働者は、職員の伝手や労働者の伝手、及び門前雇用により集合した者であり、総体として既述のような構造で生産をおこなっている。しかし、これまでの記述に主として引用した東大演習林の直営生産の規模は一〇、〇〇〇㎡であるが、小竹組、矢田組は二六、〇〇〇〜二七、〇〇〇㎡である。その差は、一方が夏季のみの作業であるのに、ここでは通年の作業をおこなっていることによる。両組とも仕事をきらさぬよう労働者に与える結果、組織が相対的に安定し、また、相対的に安い賃金で労働者を使用できるという有利性を得ている。

\* 現在では林業労働者の就労が甚だ不規則なため、継続的な就労があるていど約束されることは労働者にとり恩恵とうつる。労働者は働けない日も生活をしなければならぬからである。ここでも労働者は日々の賃金が幾分安いと認めながら二〜三年続いて働いている者が多い。

しかし、このあたりを限度としてそれ以上の生産規模をもつためには「組頭」の介入を必要とする。

河東郡上士幌町の畑中林業株式会社は、生産量六〇、〇〇〇㎡であるが、四人の組頭が約一〇〇人の労働者を集め、事務所が直接集めた労働者と併せている。最盛期には二〇〇、〇〇〇㎡に達した帯広の恵盛木材株式会社も同様であり、生産量二四〇、〇〇〇㎡の坂本木材株式会

社（本社札幌）に至っては、組頭の集めた労働者を主体としている。この坂本木材日高出張所の例により説明してみよう。日高出張所は昭和三九年度には、素材生産請負三八、四〇〇㎡、直営二七、九〇〇㎡、チップ生産一二、九〇〇㎡、国有林造林請負五二〇haの事業量をもつが、工場を別にして約三五〇人の労働者を雇用している。そのほとんどを一〇人の組頭の募集に依存している。組労働者は、道内では古くから生産のおこなわれた白糠地区の専・兼業労働者、積丹地区の漁民、東北地方青森、秋田、岩手、宮城の零細農民、それに特に集材機使用のための近畿和歌山の専業労働者である。

事務所では長年専属する組頭に作業内容を説明し、職種別に一定人数の労働者の募集を依頼し、旅費と支度金一〜二万円を組頭宛送付する。組頭は注文に応じ、既に特定の作業を遂行するに必要な技能と組織構成をもった労働者と共に作業地に来、自らも他の労働者と同様一般作業に従事する。単価決定や配置には組頭が介入接衝がおこなわれるが、作業管理には一切タッチしない。作業管理に直接加わらないといっても、既に組頭による募集の段階でその基礎的な多くの部分が片附いてしまっていることは、これまで述べて来たことで明らかであろう。日高出張所長の菅崎氏は、道内労働者は技能と労働意欲の点で劣ると指摘していたが、既にみたような事業所のもつ人対人の関係のラチ外に量

的質的に出る労働力を求めようとするときは、更に、もう一つの網の目に連った人格を求めるより外ない。しかも、それを企業に固定するために募集するのでなく、依然労働者の細分状態を変えることなく労働組織を編成するのだから、その人格は組織の形成される地域（作業地でない）に住み根源の状況に通じ、調整をおこなえるものでなければならぬ。

組頭はこのような組織形成における役割のほかに、作業の期間中組織を維持する役割を果たす。組頭は当初から自らによるにせよ事業所によるにせよ管理可能な労働者を集めていることは明かだが、日常、労働者は何々組の労働者として扱われ、組頭の同組内のものと人格的な結合関係の下におかれる。このような関係の上に事業所による日常の作業と生活の管理がたやすく行われるのである。事業所の管理が作業面でむしろ組労働者により強くおこなわれている例もみえる。組頭は以上のような年々の実績により組頭の地位を確保し、そして組頭賃をうけとる。

\* 坂本木材では、組頭に組労働者個々の稼高の三〜四%の「歩合」を支払っている。この「歩合」は他の業者も同様の額である。

右のような組頭の介在と、最初にみた自生的作業集団の存在とをひっくり返して林業の組制度または組頭制度と呼ぶことができる。

## 四、まとめ

以上みたように、素材生産は、低次の労働手段を所持した労働者の自生的な作業集団「組」の存在を基盤とする。それにより労働が可能となり、素材生産業者は、労働者の細分状態の中で労働の生産力を自らのものとすることができる。

規模の拡大は、まず、「組」の数の増加という方法によるが、それにより業者は、就労の間隙を解消したり、限定的ながら作業管理を強化したりして有利性を獲得する。しかし、或る規模に達すると逆転がおきる。作業組織の統御が人格的におこなわれ、その上労働者の細分状態に改変が全く及ばないため、規模の拡大が中央集権的な管理の強化に直ちに結びつかないで分散（組頭の介在）がおきる。その極限状況が下請制だが、その中でより高次の生産手段の使用という生産力の契機が直営主義を支える。北海道の現状では、集材機やトラクターというような甚だ低次の機械の使用も大きな生産量規模を基盤においている。

機械の使用については一時的に労働者を自らの下に固定し技術の定着につとめるというように、業者は資本家的役割を果たすがある段階に至ると再び労働者を細分状態の中に戻す。ここでも分散化が行われる。更にまた、その上の規模の拡大は出張所の数の拡大併置というように常に集積は分散化を伴わざるを得ない。

このような事情は、基本的には、林業が「労働

い。

このような視座にも関連するのであるが、素材生産の展開の基本的構造について次のように述べた。

明治以降の素材生産の技術的展開の推移をたどると――、その特徴は、第一に、生産技術の発展は一貫して土木的展開を示し（流送路の改修、道路の改良）、第二に、著しい技術的発展は山林内から部分過程をおしだしたところ、おしだせる部面でなされた。具体的には、明治三〇年代後期の製材工場の発達。道路及びトラックの発達による長距離運材の一般の運輸業の中への解消。

製材工場の発達は職人的な木挽労働を不要にし、林業労働を全体に単純化する。ここに農民が広汎に林業に参加する技術的根拠が生れる。土木的発達と人海の拡大、これが林業の展開の基礎である。

\* 林業への農民の参加、技術の単純化の基礎は、人工造林の成立・展開に基づく多種目少量生産の展開にある、と京都大学の森田学氏から指摘がある。検討してみたい。

土木的展開は主として公共的投資により、一部の山林所有者の投資によりなされた。それは全体として土地に合体する投資としての性質を有し、素材生産資本は常に零細分散された存在として約束づけられる。これは林業展開の一つの型といえよう。

「働粗放」というような特質をもっているという事柄に帰着する。素材生産が大面積の山地に散在する立木の伐倒・運搬を生産内容とし、しかも、そのような生産条件を素材生産資本は自ら創り出すことができない。大規模化は労働手段の集中により達成するのでなく、労働対象の集積により果しているのである。そのような限定的な条件の中であらう高次の生産手段の使用を可能にしてもかくも大規模生産の有利性を得ているわけだが、このような構造によりそれが全部的に大業者の有利性に結びつかないことは明かである。

具体的にいうと坂本・恵盛という日本の素材生産業者ではケタ外れの業者の生産規模は、国有林とパルプ会社の立木の伐出事業を請負うことにより、つまり、大規模生産は立木の所有とか特売制度という森林の支配関係により保たれているわけである。この関係は一般産業の請負関係と異なることは既に明かである。

なお、本州の事情との関連については、例えば前掲奥地氏の研究にみられるように、生産の異常な零細さ（北海道に比し）のために、北海道では必ずしも明確な形をとっていない単位労働集団が、技術的必然により、より明確な形をとっている例がみられる（単細胞の自立化）ということだけふれておく。

## 後記

再言すれば、我が国では山間の村落を連結するものとして、国・公の補助の下に、一部山林所有者の出資により道路が作られてきた。林業の生産過程にあるべき生産手段のうち最も後段の部分過程たる長距離運輸の資本投資が最も集中的・高額に達する理であるが、その投資は素材生産資本とは離れたところでなされたのである。生産資本は後段の大規模投資を資本内で有機的に連結せしめえず、いつまでも自らの構成を高度化することができない。結局前段の技術行程も改善されない。生産手段としての林業機械の発達は、右のような事情を背景におき、一般的（土木）機械をむしろ小規模化して林内作業に適合せしめるという機械の一般の発達とは逆ともいえる順序をとっている。

このような事情によって、素材生産資本家の機能としては、労働対象たる森林を購入し、「組」を集合させ管理する（組内の管理には至らず組間の管理）ということが主たるものとなる。森林は天然の形成物、「組」は自生的に形成され再生産する。素材生産資本は甚だ限定的な性格をもつものといわなければならない。いつまでも自らを独自化・純化しえず、従属的・付加的（兼業的）でより商人的である。

\* もとより、この点については歴史的に更に詳細に分析をしてみる必要がある。明治期あるいはそれ以前からそうであったかどうか。資本主義の生成期には素材生産資本は著しく商人的であったと

以上は林業経済研究会会報六八号に掲載された「大会報告要旨」だが、研究会でこのほかに、補足的概括的に説明をおこなっている。当日の討論にも触れながら、以下に要約して記してみよう。

まず方法論についてであるが。在来理論が、一般的な産業における資本主義の発達とか、林業以外の産業を対象として構成された理論を武器とし、対比をする、こういう論理構成をもっていた。それは林業の実態の多くの側面を摘出し整理した点大きな意義を認めることができる。しかし、外的規定・一般的規定であるという制約により、やはり残る側面があるのじゃないか、論理の内的発展性に欠けるのじゃないかと考えた。そこで、生産構造の最底辺にあるもの、最も基礎的なものとしての労働過程の実態分析にかかった。

そして、労働過程を形成せしめる生産関係を「組頭制度」または「組制度」の中に集約してみることをなる。この「組頭制度」は、更に、私の「素材生産」分析の中心的な視点としての位置を確定することになる。

研究会で単に労働組織論にすぎぬものを「素材の生産構造」と銘うつことの不当性について指摘があったが、私はこの報告を単なる労働組織論とは考えていない。しかし、このような形でしか報告できなかった不当性は認めて、機会を改めて「素材の生産構造」を総括して述べた。

同時に甚だ生産的ではなかったか。資本主義の爛熟期に入り、既記のような事情と森林資源の潤沢の進行により資本と土地所有の関係が逆転し、このような事実が生み出され拡大されていったとみるべきであろう。このような生産構造の特質は当然育林生産の部面にも及ぶと考えなければならない。この時期に素材生産資本家が育林生産資本家に転じている例をしばしばみる。

最後に、簡単にでも在来の「組頭制度」についての理解にふれておかねばなるまい。在来の研究成果を集約すると、組頭制度の特徴として、雇用形態としての非直備性・間接性、それらをめぐる非近代的な社会関係があげられようが、それならばそうでない形態のものは何なのか、という疑問は解答を与えない。たとえ組頭の「相対的独自性」が弱まり、また組頭の介在がなくなっても依然問題が片附かない。このような意識により私は既記のような「組制度」を考えるのである。在来のいわゆる「組頭制度」にはそれに加えて、賃金の前貸し、日用物資の供給による前期的な労働力支配の関係が指摘できるのだというように理解している。もとより、それに、素材生産資本や社会的諸関係の変質の問題が織りこまれることはいうまでもない。

以上で私の報告を終るが、このような未整理・断片的な形でしか報告できなかったことを最後に詫言し、再説を期したい。